

OLIVE PRESS

No.5

2001 年 5 月 発行

定価 300 円

オリーブジャパンニュースレター



SOS
エルサルヴァドル
特集号

オリーブジャパン

国際開発協力協会

目 次

■ SOS エルサルヴァドルの報告 / 住所変更のお知らせ	1
■ エルサルヴァドルからの現地報告 大橋幸恵	2・3
■ ボランティア体験談 1 内海なな	4
■ カフェタロン避難所の様子	5・6
■ ボランティア体験談 3 コニー・シム	7・8
■ 講座案内	9
■ 収支報告 / 会員制度のご案内	10

S O S エルサルヴァドルの報告とお願い

エルサルヴァドルを襲った大地震のカンパキャンペーンでは、約 350 万円の寄付を集めることができました。ご協力ありがとうございました。

この収益金はオリーブジャパンのカウンターパートである FUPROBESA（エルサルヴァドル奉仕協会）を通して、地震被害から立ち直ろうとしている子どもたちのために使わせていただきました。

エルサルヴァドルの復興にはあと 30 年かかると言われています。オリーブジャパンでは、今後もエルサルヴァドルの支援活動を続けていきます。引き続きご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

住所変更のお知らせ

新住所

〒489-0809
瀬戸郵便局私書箱 2 号

TEL・FAX 0561-85-8336

左記のように受付窓口が私書箱に変更となりました。お手元の資料等を訂正くださるようお願いいたします。今後とも、みなさまからのご支援・ご協力をお願い申し上げます。

表紙：子どもたちを洗う当事務局長の大橋幸恵

エルサルヴァドルからの現地報告

オリーブジャパン国際開発協力協会
事務局長 大橋 幸恵

わたしにはエルサルヴァドルに 3 年前に出会ったかけがえのない友人たちがいます。彼らは今回の地震で被害を受けた人たちのためにカフェタロンという大きな避難所で援助活動をはじめました。その仕事のうちのほんのわずかも手伝いたいと思い、こうして現地にきて彼らとともに活動をしています。

避難所での被災者の生活は、出発前に想像していたもの以上でした。ひどい暑さの中、ひとつのテント（四畳半ぐらい）の中に家族 7、8 人が住んでいます。彼らは何も持っておらず、ただ配給を待つ生活です。大人は仕事もお金も、生きる希望すらない毎日を送っています。ですから子どもたちは放っておかれている状態で、幼い子どもが氷くみや洗濯をしたり、妹や弟の面倒をみており、テーブルもないところで食事をしています。

このような状況で友人たちは、その子どもたちに人間らしく規則正しい生活をしてもらうために小さな教室を開きました。そしてわたしは、彼らとともにそこで子どもたちの世話をしています。毎朝子どもをテントまで迎えに行き、いろいろな授業を通して子どもたちと時間を分かち合う中で、一人一人の状況を見ることができます。例えば家族や友だちを亡くし、苦しみや悲しみ、怒りを持っている子ども、また余震が続き、揺れに対する恐怖感を常に抱く多くの子どもに出会いました。教育が行きとどいていないために子どもたちは言葉遣いを知らず、すぐ物を取り合ったり、乱暴をはたいたりします。

また衛生面では私たちのような基本的知識がないため、何日もシャワーを浴びずに汚れた服装のまま学校に通ってきました。そこで私たちはまず子どもたちを石鹸で洗いました。不衛生な状況下で子どもたちをきれいに洗うことによって、清潔でいることの大切さを知ってもらいたかったのです。また、その時間は子どもたちと家族のような関係をつくるきっかけにもなりました。

毎日 50～60 人の子どもたちが教室に通ってきます。その子どもたちを 3～5 歳、6～8 歳、9～14 歳と 3 つのクラスに分け、それぞれの年齢にあった授業を行っています。

3～5 歳のクラスでは色塗りや色の名前を覚えたり、わたしたちスタッフが絵本を読んであげたり、絵を使って頭の洗い方や手の洗い方を教えたり、自由に絵を描かせたりしています。

6～8 歳のクラスでは子どもたちは自分の持っているイメージを絵に描いたり、少しずつアルファベットを読んだり書いたりしています。

9～14 歳のクラスでは字が書ける子と書けない子に分け、まず書けない子には自分の名前を何度もなぞらせたり、読めるように一緒に発音します。字が書ける子はスタッフが読んだ本の文章を書きとめ、そこからイメージする文章を書いたり、算数や地理なども勉強しています。

午後はレクリエーションの時間としてゲームをしたり歌を歌ったり、アニメやコメディ映画と一緒に観て思いきり子どもたちと遊びます。

わたしの友人はそこで自分の才能を生かし、空手の得意なスタッフは週に

一回子どもたちに教えたり、歌の上手な人は歌を教えたり、折り紙教室を開いています。他の文化との出会いによって子どもたち自身の才能が引き出されるようになるためです。

教室に通ってくる子どもたちのほとんどは貧しくて普通は学校に行けません。中には 14 歳になってもアルファベットが書けない子もいます。しかし、わたしたちはこのようなさまざまなシチュエーションの子どもたちが通うことのできる、開かれた教室を目指しています。

毎日の授業で、スタッフが鉛筆を与えると他の子どもが取り上げようとしてけんかが始まり、罵り合ったり、その鉛筆やクレヨンの家へ持ち帰ろうとします。また、おやつ 시간にも鉛筆やクレヨンと同様、スタッフが一人ずつ配っているとところを奪おうとします。彼らは「自分のもの」という気持ちがとても強いのです。地震がおこる前までは兄弟、姉妹と何でも分け合っていたのに、地震後トラックの上から救援物資が投げ与えられるうちに、ある人はもらえて、ある人はもらえない、自分ももらえないかもしれないという不安からこのような気持ちが強くなったのだと思います。また、ある人が教室の外で飴を配ると、みんな授業を放棄して行ってしまいます。

わたしたちの援助活動は、ただ物をあげるということではなく、この一日一日、一つ一つの授業やレクリエーションを通して一緒に学んだり遊んだりする中で彼らとの絆を結び、信頼関係を築いていくことを一番大切にしたいのです。

教室で子どもたちと接する以外に、毎日の送り迎えの時には彼らの両親と話し、その家族の問題を少しずつ分かち合い、その問題に対して支援し、彼らとともに現実と向き合います。今

では少しずつ両親との信頼関係を築くことができ、以前は家の手伝いのために自分の子どもを教室へ通わせたくなかった彼らも、私たちに信頼し子どもを毎日預けてくれるようになりました。子どもたちもまた、わたしたちスタッフをみると自然に近寄ってくるようになりました。

わたしはこの子どもたちが置かれている悲惨で困難な状況をはじめてから簡単に受け入れることはできませんでした。しかし必死に彼らのために働いている友人たちがわたしの目の前にいました。彼らは子どもたちを通して、その状況を一緒に受け入れ、一人一人を人間として尊重しています。物ばかりせがむ子どもや大人を罵る子どもたち、しらみだらけの子どもたちを抱きしめキスをしたり一緒に笑ったり怒ったり、要求ばかりする大人たちの声を一つ一つ注意深く聞いて応えていました。そこにいる被災者の人たちとともに歩んでいるその姿をみて、わたしの小さな価値観、限りある自分から抜け出し、少しずつですが、時間がたつにつれ受け入れられるようになりました。

この経験はわたしが出会った友人からの大きな贈り物です。子どもたちのために働いている友人たちの中に、他人を無償に愛し、自分の自由な時間とお金（事実彼らは無償で働いています）を犠牲にしてまですべてを分かち合った人生観をみました。この人生観を持って生きている人たちは魅力的です。わたしに本当に人間らしい人間の生き方を教えてくれました。

この先日本に戻っても、たとえこのエルサルヴァドルの大地震が少しずつ忘れ去られたとしても、わたしの役目は続きます。物を与えるだけでは残せない何かを伝えられることを願って。

エルサルヴァドルでの経験

内海 なな

私がエルサルヴァドルに行こうと思ったのは、去年の夏にある人たちと出逢ったことがきっかけでした。その時私は初めてこの国の存在を知りました。しかし、中南米だということは分かっていますが、それが国名だということも知らず、どこかの国の都市名だろうという程度の知識しかありませんでした。それから彼らと数日間生活を共にするうちに、決して豊かとは言えないこの国がどのような国なのか、もっと知りたいと思うようになりました。ですから春休みには是非とも一度、友人を訪れてみたいと考えていました。

そんなところに今年の1月、大地震が起きてしまいました。このニュースを聞いたときは、行くのを止めようかとも思いました。正直なところ、万が一自分の身に何かあっても困るという思いがあったからです。しかも、行ったところで自分に何が出来るか分からないし、かえって皆の足を引っ張ることになるのではないだろうか？私は、日本で出来ることをすればいいのではないだろうか？と考えていました。しかし、こんな迷いとは比べようもないほどに苦しんでいる人たち、しかもその中には夏に出逢った友だちがいるということに改めて考えると、少しでも役に立ちたい！行くだけでも何らかの意味があるはずだ！と思い、行くことを決めました。

実際に行ってみて、私はどれだけ役に立ったか分からないし、かえって迷惑をかけたただだったかもしれません。しかし常に子どもたちが抱きついてきたり、何十メートルも離れた所からや、私が知らない子どもでも私の名前を知っていて声をかけてきてくれたことは、とても嬉しいことでした。私はスペイン語を全く話せませんでしたが、それ

でも子どもたちは話しかけてきてくれ、身振りや手振りなどで何とかコミュニケーションをとることができ、言葉はそれほど重要でないことを感じました。また、老若男女かまわず、挨拶をすれば必ず返事がくるその雰囲気、とても心地良かったです。

子どもたちと接する中で一番心に残っていることは、やはり地震の後遺症です。少しの揺れで泣きだす子もいれば、ある子にはこんなことを聞かれました。「あなたには、お母さんいる？」。その時は何も考えず「いるよ。」と答えてしまいましたが後から考えると、その子は地震で親を亡くしてしまったのではないかな、と思いました。それでも常に笑っていた彼の顔が印象的でした。

私には、お金も時間もありません。もし、今回この国に行くことがなかったら、この2週間に費やしたお金と時間は、どのようにして消えていったでしょう。おそらく何も意味の無いものへと変わっていったかもしれません。お金と時間を意味のある使い方ができて良かったと思いました。彼らの友人である私は、たとえ日本で生活していても、彼らのことを思う気持ちはもちろん変わりません。また、ある出逢いが無かったら何も始まらなかったでしょう。これからも出逢いを大切に、友情の絆をさらに深めていく意味でも他人との人間関係を深めていけたらと思います。





行き場のない子どもたちが教室に集まってきた

カフェタロン避難所の様子



服もない子どもをテントまで送るスタッフ



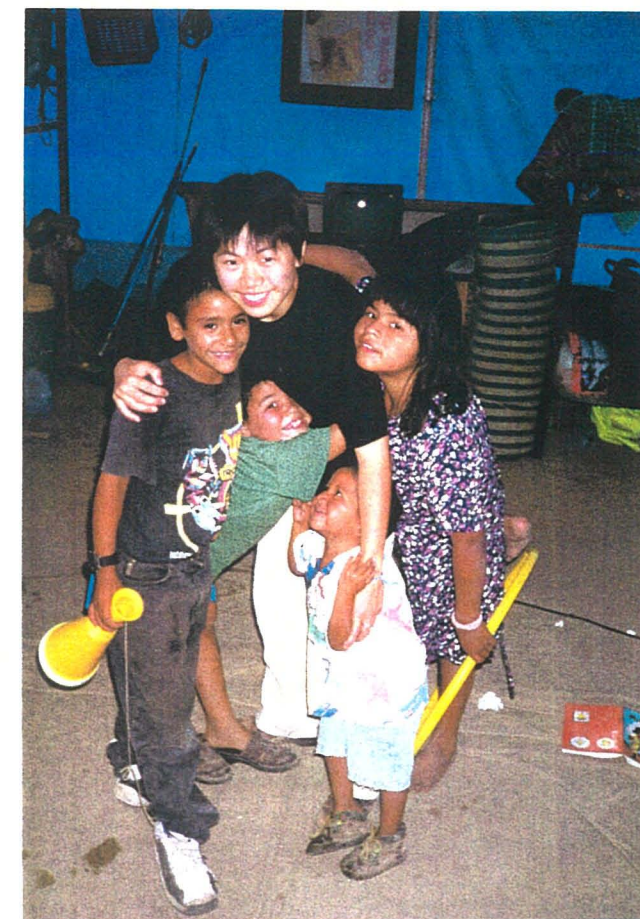
教室のようす



配給を待つ子ども



スタッフ集合



ボランティアスタッフと子どもたち

エルサルヴァドルでの経験

コニー・シム

私は春休みに、エルサルヴァドルに行ってきました。なぜそこに行ったかという、それは不思議な出会いから始まりました。カナダの大学で今回一緒にエルサルヴァドルに行ったカオルさんと出会い、3年前の夏にエルサルヴァドルに住んでいるカオルさんの姉のヒカルさんや、エルサルヴァドル人の友人にも出会いました。彼らと出会う前は、エルサルヴァドルという国を聞いたことがありませんでしたが、エルサルヴァドルに行ってみたいと思うようになりました。今年大地震が起き、現地、日本、世界各地の友だちが被害者のために一生懸命働いていることを聞いて、自分も行くことにしました。

私が行った時はもう最初の地震から3ヶ月経っていたので、状況はだいぶ落ち着いていました。町の人は普通の生活に戻りつつあり、避難所の人でも3000人程に減っていました。でも、その3000人は一番貧しい、避難所から出られない人たちだと思います。写真を見れば分かると思いますが、避難所は環境も生活も大変厳しい状況です。でも、一日に3回の食事を支給される今、彼らの生活状況は実際には地震前より良いかもしれません。

私もスタッフと一緒に毎日午前と午後にテントを歩いて回って、子どもたちを学校に連れて行きました。私はスペイン語を10単語も話せなかったの、私の仕事は教えることより、抱きしめたり、遊んだり、歌ったりすることでした。子どもたちはいつも鉛筆やぬり絵の本のような小さなことで喧嘩をしました。その喧嘩は、

口喧嘩だけではなく、石や砂を投げたり、時には殴ったり蹴ったりします。どこでこんな乱暴なことを学んだのか、私にとって大きな疑問でした。時々、喧嘩をしてはいけないことを教えたり何かの理由で子どもの鉛筆を取り上げると、子どもたちはスタッフさえ睨みつけました。彼らの瞳の中の怒りは怖いほどのもので、とても驚かされました。また、子どもたちは時々赤ちゃんの兄弟を連れてきたので私たちは赤ちゃんの世話もしましたが、赤ちゃんは一度も泣きませんでした。服も着ずに埃だらけの子どもや、グラウンドで見つけたゴミを噛んだり、ゴミで遊ぶ子どもはどこでも見られました。どのテントのどの家族にも少なくとも2、3人の子どもがいましたが、子どもたちは親から十分な世話をしてもらっていないようでした。多くの子どもたちが放ったらかしで育てられていることに大きなショックを受けました。子どもは親に守られて生きるのが当然だと思っていたからです。

毎日忙しそうに仕事に通う中流階級の人たちもありました。その一方で、薄いトタンで建てられた家で避難所と同じような生活状況の地区を見ながら、私は毎日バスに乗りました。土曜日や日曜日には、避難テントの前で多くの人がサッカーをしたり、それを観戦していました。その光景は変な感じがしました。なぜなら、それらの人たちが、忙しい日々を送っている中流階級の人たちは、まだ避難所やひどい家に住んでいる人たちの苦痛を感じていないような気がしたからです。どうして何も援助することなく、

避難所の目の前でサッカーを楽しむことができるのでしょうか。そう思ったとき、私は自分が今までその人たちと同じように観客でしかなかったことに気がつきました。私は自然災害、戦争などの被害者のニュースを知るたび「可哀想だなあ。」と思いそれで終わっていました。「被害者は知らない人たちだから、私には何もでき

ない。」と気にしていませんでした。しかし、今回のこの地震で、自分のこととして感じました。私は友人たちを通して、反対側の立場から見る事ができて良かったです。なぜなら、自分自身を含め多くの人たちが、自分のことではないと何の援助も考えないということに気づき、それが悲しいことだと感じられたからです。

SOSサルヴァドルチャリティー文化講座

カタコンベ（キリスト教地下共同墓地）

— 迷宮に響く祈り —

講師 山田順氏（ローマ教皇庁立キリスト教考古学研究所大学院修了）

日 時： 6月17日（日）16時

ところ： イタリアンカフェ「ダ・マンマ」

名古屋市名東区社台3丁目56-2サンテラス葵1A

地下鉄東山線 上社駅下車西へ徒歩5分

tel. 052-772-3080

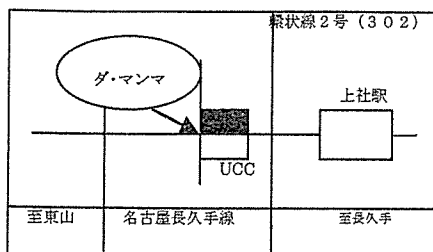
参加費： 講 座 1,000 円

食事付 3,000 円（お食事希望の方は必ず予約ください。
満席になり次第締め切らせていただきます。）

◇次回は10月、カラバジヨの絵をテーマに柴田高良氏（洋画家）による講演を予定しています。

◇4月から新たに「フラワーアレンジメント講座」が開講しました。毎月第1月曜日7時から、イタリアンカフェ「ダ・マンマ」にて。講師 林久乃（フラワーデザイナー）。

イタリア語・英語講座・スペイン語講座・
イタリア料理講座・フラワーアレンジメント講座はすべてイタリアンカフェ「ダ・マンマ」（TEL052-772-3080）で行っています。



オリーブジャパン講座案内

少人数制で楽しく学べる当協会オリジナル講座の一覧です。

講座の収益はすべて中南米の貧困に苦しむ子どもと若者への教育支援事業に使わせていただきます。

語学講座

ESPAÑOL		初級スペイン語講座
日 時	毎月第2・4木曜日	19時00分～20時30分
講 師	大橋幸恵・榊原利恵	
月 謝	6,000 円	
ITALIANO		実践イタリア語講座
日 時	毎月第2・4金曜日	19時～20時30分
講 師	Angela Volpe	
月 謝	6,000 円	
ENGLISH		やさしい英会話
日 時	毎月第1・3水曜日	19時～20時30分
講 師	吉見かおる	
月 謝	6,000 円	

◆ 語学講座の会場 ◆ イタリアンカフェ ダ・マンマ

文化講座

洋 画 入 門 講 座	
日 時	毎月第2・3火曜日 19時～21時
会 場	東生涯学習センター美術室（地下鉄東山線 新栄町下車 徒歩3分）
講 師	柴田高良
月 謝	4,000 円（画材実費）
イ タ リ ア 料 理 講 座	
前 期	4・5・6・7・9月（5回）
後 期	10・11・1・2・3月（5回）
会 場	イタリアンカフェ ダ・マンマ
講 師	柴田淑美
月 謝	1講座3時間程度 4,000 円（食材費込み）
特 記	日時は相談して決めるので変動します（日曜日の昼11時からが多い。）
フ ラ ワ ー ア レ ン ジ メ ン ト 講 座	
日 時	毎月第1月曜日 19時～20時半
会 場	イタリアンカフェ ダ・マンマ
講 師	林 久乃
月 謝	4,000 円（花・花器・お茶代込み）

◆ 文化講座・語学講座問合せ ◆ オリーブジャパン国際開発協力協会

TEL・FAX 0561-85-8336

（水曜日 11時～14時30分 受付）

収支報告 2000 年 4 月～2001 年 3 月収支決算

単位:円

収 入		支 出	
前年度繰越金	3,987	海外支援事業費	3,646,915
		一般賃借料	473,000
寄付金収入	3,920,079	備品代	409,488
広報事業収入	1,299,015	人件費／交通費	325,600
会費収入	530,500	通信費 郵便／電話	324,447
		印刷費	180,075
		消耗品費	141,903
		広報活動事業準備費	125,200
		資料費(写真)	80,058
		光熱水費	36,493
		その他	7,200
		次年度繰越金	3,202
合 計	5,753,581	合 計	5,753,581

会員制度のご案内

オリーブジャパンでは活動内容に賛同していた
だけの個人・団体を募集しています。会員制度は
一年を通してオリーブジャパンを支えることがで
きます。

- A) 賛助会員 (1ヶ月一口 10,000 円)
- B) 正 会 員 (1ヶ月一口 5,000 円)
- C) 協力会員 (1ヶ月一口 2,000 円)
- D) 参加会員 (1ヶ月一口 1,000 円)
- E) 同調会員 (1ヶ月一口 500 円)

<申し込み方法>

郵便局所定の「郵便振込用紙」に必要事項と会員の種類、納入方法（月払い／年一括）を記入
の上、会費を納入ください。後日事務局より受領の案内をさせていただきます。

口座番号：00890-1-24582

口座名義：オリーブジャパン国際開発協力協会

臨時寄付も
受け付けています。

- ◇ 会員期間は振込日より一年間、継続も可能です。
- ◇ 会員のみなさまには会報「OLIVE PRESS」と講演会・バザーなどのご案内を優先的にさ
せていただきます。

OLIVE PRESS No.5 定価 300 円

発行日 2001 年 5 月
編 集 オリーブプレス編集部
発 行 オリーブジャパン国際開発協力協会
〒489-0809 瀬戸郵便局私書箱 2 号
TEL・FAX (0561) 85-8336
